

東洋紡株式会社 2023 年度 第 3 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2024 年 2 月 9 日（金） 9:00～10:00

場所：WEB 形式

説明者：代表取締役 社長 竹内 郁夫

代表取締役 専務執行役員 管理部門統括 大槻 弘志

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：「コスモシャイン SRF」の 3Q 累計の実績、足元の競争環境や今後の見通しは？

A：前年同期比約 40%の増収。偏光板メーカーの業界再編が起こっているが、当社ポリエステルフィルムを採用するユーザーが増えており、来年に向けても強気のアナウンスを受けている。今後、薄肉化や既存生産ラインの切替えなどで供給量を増やす計画。

Q：セラミックコンデンサ用離型フィルムの 3Q の実績、今後の見通しは？

A：1Q、2Q に対し 3Q は販売が回復しているが、ミドルエンド・ローエンドが中心。ハイエンドの回復はもう少し時間がかかる見通し。

Q：包装用フィルムの足元の需要減は、脱プラスチックの影響を受けているのか？また、今後需要は元に戻るのか？戻らない場合、どのような打ち手を考えているのか？

A：足元の需要回復の遅れは、流通在庫の調整に加え、一部の素材は輸入品の影響も受けている。また、脱プラスチックやインフレによって消費行動も変化してきており、包装材のデザイン更新や規格数の減少がフィルムの需要減につながっている。需要は緩やかに回復するが、コロナ前には戻らないと予測している。古い機台の休止など固定費全体を落としていくとともに、薄肉化、バイオマス、モノマテリアルなどの環境配慮型フィルムの販売を増やしていく。

Q：PCR 検査用試薬の 3Q 累計の実績は？足元の感染者の増加は需要増に繋がるか？

A：前年度比 9 割減の状況。感染症法における分類が 5 類に移行し、検査法が PCR 検査から抗原検査へ移行が進んだことから、感染者の増加が PCR 検査用試薬の需要増に繋がるとは見ていない。

Q：環境・機能材の 3Q の営業利益が 26 億円に対し、4Q は 10 億円。前倒し需要の反動減以外に大きな変調は無いのか？

A：3Q に大きく伸ばしたのは、VOC 回収装置。出荷時期による変動が大きく、4Q に販売は落ちるが受注は堅調。その他事業も含め、3Q から 4Q に大きな変調は無いと見ている。

Q：営業利益の増減分析において、来年度の「原燃料」「売値」「その他」の要因をどう見ているのか？

A：原燃料影響は、来年度上期にプラスへ転じる見通し。売値は、物流費上昇分など原燃料価格以外の転嫁を進める。その他については、新社設立費用や新機台立上げ費用などの一時的な費用が減少する。

Q：棚卸資産が増加した理由は？

A：一部製品での備蓄生産が主な要因。フィルムなど必要に応じた減産はしており、異常な在庫増加となっているわけではない。

以上